



第36回九州ジュニア選手権競技

競技報告 (2016/ 7. 28 -29)

写真と記事 : M. Kikutake

【15～17歳の部】

男子は

清水大成 (東福岡高3年) がプレーオフで**稲田愛篤** (沖学園高3年) を下し初優勝

女子は

大里桃子 (熊本国府高3年) が2連覇達成



【12～14歳の部】

内藤滉人 (大分中3年) がプレーオフで**後藤大翔** (大津北中) を下してV

女子は**園田結莉亜** (大分中3年)

7月28、29日の2日間、大分県竹田市の久住高原ゴルフ倶楽部(男子7175ヤード、女子6441ヤード=パー72)で行われた。男子は12～14歳の部15～17歳の部ともにプレーオフとなったが、通算5アンダー、139で2人が並んだ15～17歳の部では、清水大成(東福岡高3年)が4ホール目で稲田愛篤(沖学園高3年)を下し、12～14歳の部は通算4オーバー、148で並んだ内藤滉人(大分中3年)が後藤大翔(大津北中2年)を2ホール目で下し、ともに初優勝した。

女子は15～17歳の部が通算4アンダー、140で大里桃子(熊本国府高3年)が2年連続で2度目の優勝、12～14歳の部は通算イーブンパーの144で園田結莉亜(大分中3年)が初優勝した。

なお、12～14歳の部は大分中が男女を制し、アベック優勝を果たした。

出場したのは15～17歳の部の男子49人(欠場2人)、同女子40人。12～14歳の部は男子35人、女子35人。

予選通過は前年同様、15～17歳の部男子が40人、同女子32人、12～14歳の部は男女ともに28人だった。初日、雷雲の接近で午後3時55分から、45分間の中断があったが、全員がホールアウトした。

競技では、15～17歳の部男子は初日、稲田と上村竜太（神村学園高1年）の2人が4アンダーをマークして首位タイスタート。これを1打差で篠原仕師命（沖学園高3年）と夏伐蓮（宮崎日大高1年）の2人が追う展開となった。最終日は難しいピンの位置にスコアを乱す選手が続出。そんな中、稲田は3バーディー、2ボギーの71と1つスコアを伸ばしたが、首位に3打差と出遅れていた清水がこの日はボギーなしの4バーディーとチャージ。稲田をとらえてプレーオフにもつれこんでいた。

同女子の大里は初日、6アンダー66をマーク、今年の九州女子選手権を制した2位の後藤未有（沖学園高1年）に3打差をつけて飛び出した。最終日は74と乱したが、後続も伸びず、逃げ切って2連覇を達成した。3打差の2位は小貫麗（熊本国府高2年）で、後藤は阿部未悠（第一学院高1年）とともに通算イーブンパーの3位タイ、さらに1打差の5位タイには、この日のベストスコア71を出した佐渡山理莉（名護高1年）と井戸川菜摘（宮崎日大高1年）だった。

12～14歳の部は大分中がアベックV

12～14歳の部男子は初日、首位に1打差2位タイの内藤がこの日75、3打差6位タイの後藤が73で回り、4オーバーで並んでプレーオフとなった。最終日69とただ1人の60台をマークした中野恵将（飯塚第一中2年）が1打差の3位に入り、初日パープレー72で首位だった出利葉太郎（片江中3年）は8オーバーの6位タイだった。

女子は初日、塩澄英香（内浜中3年）が3アンダーで首位。これに1打差2位タイの園田が最終日、逆転で優勝。

この試合の結果、15～17歳の部で男子上位16人とシード選手3人、女子10人とシード選手1人、12～14歳の部男子7人、同女子9人が8月17日からの第22回日本ジュニア選手権（男子は霞が関CC、女子東京GC=いずれも埼玉県）への出場権を得た。



「負けない」と強い気持ちで臨んだプレーオフ

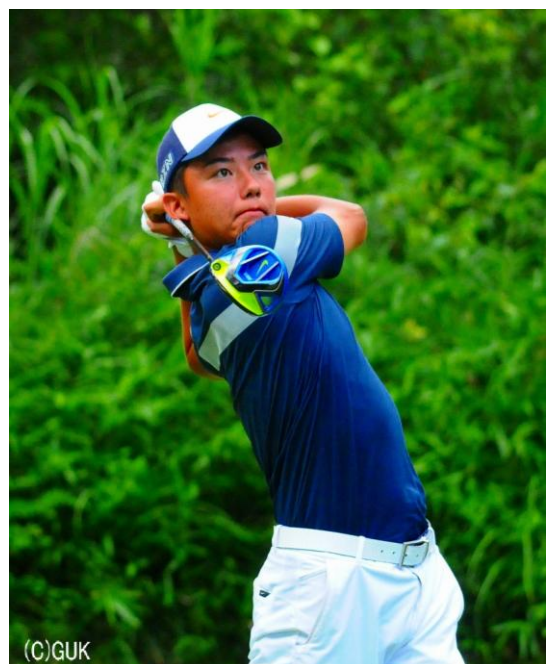
勝利を手繰り寄せた清水大成

高原の夏はやはり、暑い。そんな暑さに負けずジュニアたちが熱い戦いを繰り広げた。

通算5アンダーで並んだ2人によるプレーオフ。だらだら上りの10番（パー5）と折り返しの下り11番（パー4）の繰り返しで行われた。3ホール目までは両者パーで譲らず、最終ラウンドからの通算で22ホール目に入り、暑さもあっていよいよ耐久レースかと思われたとき、決着がついた。

「本当に、勝ちたかった」と清水だった。というのも、2年前、1学年上の葛城史馬（ふうま、当時大分・宇佐高2年）とやはりプレーオフにもつれこみながら、1ホール目に第2打OBで自滅、涙をのんだ経験があったからだ。

東福岡高校（福岡市）の最終学年。ゴルフでは無名校でもある。学校にゴルフ部はない。いわば孤軍奮闘のジュニア競技生活だ。それだけに、相手が違うが、同じ久住高原の舞台で借りを返すという決意と、自分が頑張ることで後輩がゴルフを始め、「部ができれば」という思いもあったからだ。



この日は「ドライバーの調子があまりよくなく、結構ラフに行った」とはいうものの、「アプローチでは結構パーオンして、神経使うパットはあまりなかった」という。だから、プレーオフに臨んでも、じっと耐えて、「チャンスが来れば一気に」という強い気持ちだったそうだ。

その強い気持ち、こそが「これまでの自分に欠けていたこと」と清水は言う。いい勝負はしても、勝てない。「しっかりした気持ちが持てていなかった」からだ。

この後は、昨年5位になった日本ジュニア。今年は「それ以上を」と控えめの抱負だったが、この日の優勝で脱皮した清水の「強い気持ち」に期待したい。



一步前進。2連覇を達成した大里桃子

〇…出だしの3番でいきなり4パットのダブルボギー。そのとき、3打差あった同じ最終組の後藤未有との差は1打になり、「さすがに内心は焦りました」と笑う。このあと6番でもボギーとして折り返したが、11、12番と連続バーディーで息を吹き返した。結局は初日の貯金が効いての逃げ切り成功。

これまで、九州女子選手権を制している田中瑞希（熊本国府高）や新垣比菜（沖縄・興南高）、勝みなみ（鹿児島高）ら同級生に先行されていた。しかし、昨年の九州ジュニア優勝で「自分のプレースタイルを貫くしかない」と話していたが、「実は連覇は意識していないようで、していた。考えないようにしてはいたけど」と大里だ。

焦る気持ちを飲み込んでのV2を達成したところに、一步前進した姿を見る思いだ。

高校を卒業すると「プロテストを受けます」という。その前に、宿題が残っている。今年の日本ジュニアは「昨年（ベスト5）以上、優勝を目指して」と大里だった。

プレーオフを制して初優勝の内藤滉人（3バーディー、6ボギー）フェアウエーは3回しかキープできなかったけど、11回パーオンできた。よく我慢できたと思います。プレーオフは相手は2年生だし、負けられないと気合が入りました。日本ジュニアは初めてですが、優勝を狙ってきます。

逆転初優勝の園田結莉亜（1バーディー、3ボギーと手堅いプレー）昨年はパットに悩んでいて、パターをピンタイプに変えた。それがやっとフィーリングがあってきた。昨年は1打足りずに日本ジュニアには行けなかった。今年は3年生で中学最後。全国で1つは勝ちたい。そのチャンスだと思います。